

コンピテンシ領域Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵに関する
コンピテンシー習得のための保健医療福祉の演習教材の開発
分担研究者 平野隆之（日本福祉大学大学院・特任教授）

【研究要旨】

保健医療福祉資格に共通して求められるコンピテンシー習得に向けた教育コンテンツとして、平野隆之・田中千枝子・藤井博之・水谷聖子『コンピテンシー習得のための保健医療福祉の演習教材：保健医療福祉資格に共通したコンピテンシー 5領域対応』の冊子（99頁）を作成した。なお、同演習教材の開発に至る過程において、日本福祉大学看護学部の看護学生（1年生）を対象に、4事例を用いた演習を試行的に実施し、その参与観察とともに、事後アンケート調査を実施し、それらの結果を、コンピテンシー習得のための保健医療福祉の演習教材の内容に反映させている。

A. 研究目的

本研究の目的は、保健医療福祉資格に共通して求められるコンピテンシー習得に向けた教育コンテンツとして、事例演習の教材を開発することにある。具体的には、5つのコンピテンシーⅠ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ（Ⅱ.科学的思考とその展開を除く）ごとに、3つの事例演習教材（合計15演習教材）を開発することを通して、共通基礎課程の試行的な取組みを教材面からバックアップすることにある。

B. 研究方法

日本福祉大学看護学部の看護学生（1年生）を対象に、4事例を用いた演習を試行的に実施し、その参与観察とともに、事後アンケート調査を実施することで、演習教材の活用上の留意点を整理し、「コンピテンシー習得のための保健医療福祉の演習教材」の作成に活かす。

同演習教材の編集作業においては、7専門職種を想定して作成された「保健医療福祉資格に共通して求められる基礎コンピテンシー試案 ver3.0(大西弘高作成)を基にしている。かかるコンピテンシー試案は、共通基礎課程を経ることにより、職業倫理、心身に関する知識など医療・福祉職として必要な基礎的な素養とともに、多職種連携、地域・社会活動など地域共生社会を担う人材として欠かせない視点を身につけることを視野に入れたもので、そのねらいを踏まえて、本書の15事例を選択する。

（倫理面への配慮）

日本福祉大学看護学部の看護学生（1年生）を対象とした事後アンケート調査においては、無記名により個人情報保護に配慮するとともに、演習教材の開発において参照することについて了解を得た。

C. 研究結果

1. 演習教材の開発上の視点と留意点

1) 演習教材の開発上の視点

第1の視点は、演習事例のテーマにおいて、専門職への本人（当人）や家族からの投げかけのコトバを多く採用することで、リアリティを取り入れる（以下の演習教材事例のテーマを参照）。その意図するところは、領域Ⅳにおける「当人の理解と支援」のコンピテンシーを重視し、それを起点にしながら、残りの領域Ⅰ・Ⅲの「倫理と改善」とⅤ・Ⅵの「協働的实践と社会への働きかけ」への学びを展開することを目指した事例のテーマを設定することにある。なお、領域Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵの12事例では、Ⅳとの関連性が深いのが6事例を占めている（以下の事例テーマのリストを参照）。

第2に、演習教材の構成は大きく3つのパートに分けて編集している。最初に、「1. 事例」、次に演習を示す「2. 考えるテーマ」、そして最後には共通基礎教育として不可欠なキーワードの理解を目指す「3. キーワードの解説（大分類と中分類）」を配置する。「考えるテーマ」を重視した内容とするためには、「事例」と「キーワード」との関係を連続的に理解させる工夫が必要であることから、キーワード（大分類：表1を参照）の解説において、単に用語解説を行うのではなく事例の文脈に沿う内容としている。基礎課程の教育であっても、事例の文脈理解が強く求められるとの判断が反映する編集を試みている。

表1 15のキーワード（大分類）

領域Ⅰ	4つの痛みと全人的支援	守秘義務	スーパービジョン
領域Ⅲ	転倒リスク	LIFEの三層(生命/生活/人生)	インフォームド・コンセント
領域Ⅳ	エンパワーメント	支援困難事例	当人の自律性・主体形成
領域Ⅴ	連携（機関間）	多職種協働実践のチームワーク	自己決定とチームによる支援
領域Ⅵ	施設と地域のコンフリクト	インフォーマル資源	ソーシャルアクション

（資料）筆者作成

2) 試行的な演習から

活用方法を紹介する上で、最初にこの演習教材を試行的に実施した日本福祉大学看護学部（1年生）の講義の実際に触れておく。3回にわたって実施され、用いた事例は4事例を用いた。演習を指導したのは、科目担当の平野ではなく、多様なゲスト講師である。教材に用いた事例執筆者でもある田中千枝子（社会福祉学部教員）、教材としては用いていない事例執筆者の水谷聖子（同看護学部教員）、実践者（事例に登場する内容の経験を持つ）である。この組み合わせは、保健医療福祉資格に共通した演習教材を担当する者の3つのパターンを想定したもので、①事例の文脈に沿った分野の教員、②学ぶ学生の専門分野の教員、③事例に登場する実践者と類似の実践者（事例と同種の経験を持つ）の3パターンとして整理できる。それぞれが担当する演習の観察から、担当者の一般化を想定した要約的なメリットとデメリットを記述すると表2のようになる。

表2 演習担当者別のメリット・デメリット

	メリット	デメリット
①事例の文脈に沿った専門分野の教員	事例の文脈に沿った情報や関連キーワードの解説が十分になされる。	演習の課題が高く設定される傾向となり、学びに差が生じる
②学ぶ専門分野の教員	受講学生の学習ニーズに対応した演習の組み立てが可能なる。	比較的少ない。ただし教員による事例の文脈の事前準備が必要となる。
③実践者（事例に登場する実践者と類似）	事例を補足するリアルな情報が提供され、現場のジレンマが伝わる。	わかりやすさを重視し、情報提供が多くなる結果、考える要素が少なくなる。

（資料）筆者作成

①のパターンでは、事例のテーマを専門とする教員が担当する場合で、ややもすると演習の課題設定が高度になることが予想される。②の受講学生の学習ニーズを踏まえた教員が活用することになることから、事例の文脈に関する事前学習が確保されれば、デメリットなく活用できる。ただし、③の実践者を確保できれば、演習の事例紹介等を実践者がリアリティを含めて報告し、科目担当教員が演習のコーディネートを担当する方法も魅力的といえる。

3) 演習教材の活用上の留意点

以下、留意点に触れておく。

- ①研究プロジェクトとの関連で、共通基礎課程の教材としては1年生を想定しているが、1年生への提供以外にも可能である。専門教育を経たなかで、再び共通基盤の学び直しにも活用することも可能といえる。
- ②考えるテーマの記述において、事例によっては、考えてほしい内容がきめ細かく記述されている事例もあるので、演習の際にどこまで学生に求めるかを判断する必要がある。
- ③演習教材では、支援上のジレンマを糸口にしつつワークを展開することを多く採用している。その一部については、試行的実施の経験を踏まえて、シートを提供している。ワークの種類としては、ロールプレイが取り上げられ、演じてみたい登場人物を選択させ、さらにその後のストーリーを描く課題を設定したものが含まれている。
- ④キーワードの説明については、事例の文脈を受けた解説となるようにしている。大分類では、事例の文脈を重視しているが、中分類のキーワードでは一般的な理解の記述が目指されている。

⑤事例の提供では、「イメージや背景の理解が進むこと」をねらいとするとともに、共通基礎課程のなかで重視したいと考えてきた「専門職間での捉え方の違いがわかる」ことにも配慮している。IPEの場面での活用も可能といえる。

2. 演習教材事例のテーマ

教材事例のテーマは、以下のように設定している。なお、()内に基礎コンピテンシー試案における要素、[]内には関連するコンピテンシー領域の番号を記している。

1) 領域Ⅰ：専門職の自律と職業倫理

事例 1 (1)：「自分が死んだら献体にしてほしい」ターミナル期の患者に対する全人的ケア [V]

事例 2 (2.3)：「あなただけに相談するの」と打ち明けられた話しをチーム内でどこまで共有するか [V]

事例 3 (6.7)：「私が解決してあげたかったです」巻き込まれて責められて苦しかった私のスーパービジョン体験 [IV]

2) 領域Ⅲ：安全の確保と質改善

事例 4 (1.5)：入院中に歩行器歩行自立と評価され、トイレ歩行の際に転倒・骨折された女性 [IV]

事例 5 (3.4)：「『口から食べたい』を叶えたい」：嚥下障害のある特養入所希望者に対する介護体制整備 [V]

事例 6 (4)：「なぜ転院しなければいけないのですか」インフォームド・コンセントの質改善に関する組織的取組み [I]

3) 領域Ⅳ：当人の理解と支援

事例 7 (3.4.5)：脳出血からの回復後に運転再開を契機に「久しぶりに頼もしく感じた」と妻に言われた男性 [V]

事例 8 (4)：「天の岩戸はどうしたら開くのか」ゴミ部屋の住人に彼の世界を教えてもらう [VI]

事例 9 (5)：「ずっと住めるところがいい」と出所前に語る刑余者の地域生活支援 [V]

4) 領域Ⅴ：チーム・組織の理解と協働的实践

事例 10 (1.5.7)：「月曜日に退院なのでサービス担当者会議をお願いします」 [VI]

事例 11 (3)：「またこの子救急センターに来たの？」こども虐待対応チームの協働的实践 [IV]

事例 12 (6)：自分らしい生活の第一歩を目指す本人の自己決定と家族の不安 [IV]

5) 領域Ⅵ：地域・社会活動とソーシャルアクション

事例 13 (1.3)：認知症高齢者が持ち去った白菜一個から施設と地域のつながりを考える [IV]

事例 14 (3)：地域の支え合い活動を支えるための専門職の仕事が生まれている [IV]

事例 15 (4)：医療的ケア児を介護する家族のレスパイト事業の施策化を目指す自立支援協議会 [V]

なお、事例の執筆分担は、以下の通りである。平野隆之（分担研究者）：事例 13. 14. 15、田中千枝子（研究協力者：社会福祉学部教授）：事例 1. 3. 5. 6. 8. 11、藤井博之（研究協力者：長野大学教授）：事例 2. 4. 7. 10、水谷聖子（研究協力者：看護学部教授）：事例 9. 12 である。

D. 考察

コンピテンシーの 5 領域は、Ⅵの 5 項目からⅣの 11 項目まで細分化されている。その細分化された項目（要素）にどのように対応して、事例のテーマが選択されているかを示すなかで、コンピテンシー要素との関連性を重視した。複数対応しているものがあるとともに、他の領域との関連性の高いものも少なくない。いかにいえば、複数のコンピテンシー要素・領域に内容が及んでいることが、実際の事例では必然的に生じているといえる。

本演習教材は共通基礎課程のみでの活用だけではなく、一般の講義や IPE（多職種連携教育）のなかでも活用可能なように編集している。今日的な課題となっている多職種間連携を視野に入れることは不可欠な課題との認識からである。ただし、演習の焦点は、あくまで多職種間での「共通部分」の理解ではなく、共通して持つべき「基礎基盤」となるコンピテンシー習得である点を重視した記述としている。

E. 結論

保健医療福祉資格に共通して求められるコンピテンシー習得に向けた教育コンテンツとして、平野隆之・田中千枝子・藤井博之・水谷聖子『コンピテンシー習得のための保健医療福祉の演習教材：保健医療福祉資格に共通したコンピテンシー 5 領域対応』の冊子（99 頁）を作成した。内容としては、最初に「1. 事例」、次に演習を示す「2. 考えるテーマ」、そして最後には共通基礎教育として不可欠なキーワードの理解を目指す「3. キーワードの解説（大分類と中分類）」を配置している

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

（発表誌名巻号・頁・発行年等も記入）

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし